

民生委員だけではなく、多くの方に参加していただいているので、以前より少しその（地区社協の担い手の）幅が広がっています。また、地区社協の場が、支援者同士を結びつけ、支援方法などを検討する場となっているところもあり、そういった点で民生委員の負担が軽減されているのかなと思います。

市川市と同じように、愛媛県松山市でもサロンの場が、民生委員の負担軽減や担い手不足の解消につながっているようです。

松山市の（民生委員の）定数は、900名以上いますが、欠員が1人もいないということです。市内約290ヶ所以上でサロンが開催されており、ここに多くの地域住民が、その担い手として活動しています。

退任間近の民生委員は、その様子を見て「この人なら大丈夫だ。民生委員をまかせられる」と、後任の候補者探しをするようになったようです。地域の中で選べる人が増え、「次はあなたお願いね」と言って辞めていくので、欠員が出なくなったというわけです。また、その新任委員が困った時にも、既に知っている、助けてくれる方が周り（地域）にいたので非常にやりやすい環境ですよ。

大野 地区社協の活動の場合、なぜ負担感が少ないのかということ、参加することに暗いイメージが無いということがあると思います。

民生委員活動ですと、どうしても難しい事例を扱うことが多いので、どこか重苦しいイメージがありますが、地区社協の場合には催し物に参加して、住民の方と会話をしたり、楽しく参加できるイメージがありますね。

前回の一斉改選時、流山市では欠員数が県内でも多い方でした。あの時、世間では「消えた高齢者問題」が騒がれていて、私には重くてとてもやることができないという人がいました。

山崎 たしかに、厚生労働大臣の委嘱状を持って活動できる場面というのは、大野さんが言われるようなところがある気がしますね。

羽田 民生委員が、地区社協の機能や活動に価値を見出すことができれば、負担感という話は全然違うものになってくると思います。

例えば、地区社協に「情報が集まる」とか「（支援者）仲間がつながる」というような機能があれば、民生委員にとっても地区社協に出ていく意味があると思いますし、それが結果として、地域の中での課題解決力を上げることにもつながります。地区社協の役割の一つには、地域に“つながる仕組み”を作るといったことがあると思います。

山崎 よくわかります。都市部でも中山間地でも、地域課題はどこも同じなんです。田舎だと、何でも知っているかというところでもない。段々、人口が減ってきて、隣の家との距離が離れていくと、家の中に閉じ込められてしまうようになります。昔のことは知っているけど、今誰がそこに住んでいるのかはわからないという状況なんです。

地域みんなを集めて、「今あそこの家はこういう状況だ」ということを確認できるように“つながる仕組み”を作らないと、地域のことわからなくなってしまう状況にきています。

羽田 地域住民の中で、民生委員はこういう人で、だから自分たちが選んだという意識がないと、現実的には民生委員が活動をする上でも立場上でも非常に苦労します。逆に、それを作ることができれば、活動しやすくなると思います。

それを作るのは、行政の役割で、地域や地区社協に対し、民生委員の役割などを訴えかけていく必要があります。ただ、その前に（行政が）民生委員の役割というものを明確にしておかないと、地域に説明することはできません。

私が普段地域の方や民生委員の皆さんに言っていることは、民生委員は「個人を援助するという機能はあるが、すべてを援助できるわけではない」こと、また「つなぐ」役割と「地域の情報を集める」役割があるということです。

地区社協はというと、これまでいろいろな方